

表3 平成16年度富山県内のツキノワグマの月別捕獲被害件数(平成16年12月5日現在:富山県自然保護課資料)

	月別											
	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
捕獲総数	120	18	4	2	0	4	14	59	17	1		
内放獣頭数	14	0	0	1	0	1	3	6	3	0		
人身被害件数	16	0	1	0	3	0	5	7	0	0		
人身被害者数	24	0	1	0	4	0	8	11	0	0		
交通事故死数	4	0	0	0	0	0	3	0	1	0		

※人身被害件数と人身被害者数の差は、1頭のクマが複数名を襲ったものと捉えているものがあるため生じている。  
 ※交通事故死は、新聞で把握している数。  
 ※9月の3頭はいずれも魚津、11月は福光で事故発生。

表4 富山県内におけるツキノワグマの捕獲数の推移およびその内訳(H16年12月9日現在:富山県自然保護課)

年度	平成元																																		
	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16																				
有香鳥獣捕獲(駆除)	256	35	66	65	106	81	25	73	25	22	32	33	23	34	30	32	43	33	56	37	19	29	35	17	27	8	24	20	17	42	34	26	33	27	120
狩猟	30	14	9	23	28	14	27	27	22	16	11	28	16	22	22	23	21	28	42	11	20	19	23	16	16	24	5	43	27	36	39	30	15	32	14
計	286	49	75	88	134	95	52	100	47	38	43	61	39	56	52	55	64	61	98	48	39	48	58	33	43	32	29	63	44	78	73	56	48	59	120

有害:有香鳥獣捕獲(駆除)による捕獲  
 放獣:ドラム缶等で生け捕りにしたクマにお仕置きによる学習をさせて、奥山放獣したもの

【観察ノート】

高岡市国分・雨晴海岸へ漂着したルリガイの観察

邑本順亮

〒933-0041 高岡市城東1-8-12

Abundant shells of *Janthina (Violetta) exigua* LAMARCK  
 Arrived at the Beaches of Amaharashi and Kokubu, Takaoka-City,  
 in the Autumn of 2004

Junryo Muramoto

1-8-12 Joto-machi, Takaoka-City, 933-0041 Japan

2004年の秋に高岡市国分浜や雨晴海岸へルリガイが多数漂着した。その観察結果を報告する。

なお、この機会に出会えたのは、9月26日に雨晴海岸で催された富山市科学文化センター自然教室の時に多くのルリガイが採集された、という布村昇館長からの情報がきっかけである。また、原稿をご一読頂き有益なご意見を頂いた。同氏に厚く御礼申し上げる次第である。

ルリガイ *Janthina (Violetta) exigua* LAMARCK は暖海性で巻き貝様の殻を持ち、自身が分泌して作った“筏”と呼ばれるポリスチレンのような構造の浮きに垂下して浮漂生活をする軟体動物である。富山湾へは対馬暖流に乗って運ばれてくるもので年によって漂着状況が異なり、最近では2000年に比較的多く漂着した。



写真1 採集したルリガイとその筏

雨晴海岸へ採集に出かけたのは2004年10月4日の夕方である。雨晴海岸の通称“義経岩”西側で漂着して間もないと思われる数多くのルリガイを見た。筏に付いたままの生体が幾つも漂着していたので、できるだけ多くの個体を筏と共に採集して帰った。

2000年秋季に富山湾沿岸を石川県の能登島まで北上して調査したが、この時採集できたのは打ち上げられた貝殻がほとんどで、しかも1地点でもくても10個程度であった(邑本・布村、2001)。

今回は、雨晴の通称“義経岩”西側で10月4日に筏に付着した状態の生体およそ10個体余りを含む64個体、10月6日には国分浜の加古川河口より東側で138個体を採集した。国分の場合は筏に付着したまま干からびた個体がいくつもあった。

ほかに庄川河口で2個体を採集したが、それより東の海岸では採集されなかった。

このような観察結果から雨晴・国分ともに10月3日から4日にかけて漂着したものと判断した。漂着した貝殻はその後数日の間に風や波で飛ばされたり砂浜に埋ったりして見当たらなくなることもわかった。

採集した貝殻は前回(2000年秋季)に比べて小さいものが目立つようだったので計測してみると、表1・表2のようになった。前回は採集個体



表1 2004年ルリガイ計測値1 (殻高)

殻高(mm)	国分	雨晴	計	国分	雨晴	計
39	.	1	1	.	.	.
38	.	.	.	2	1	3
37	.	.	.	1.45%	1.56%	1.48%
36	.	.	.	.	.	.
35	2	.	2	.	.	.
34	.	2	2	.	.	.
33	.	.	.	.	.	.
32	3	1	4	18	9	27
31	10	2	12	13.05%	14.06%	13.37%
30	5	4	9	.	.	.
29	8	5	13	.	.	.
28	5	1	6	.	.	.
27	11	4	15	37	21	58
26	8	2	10	26.81%	32.81%	28.71%
25	5	9	14	.	.	.
24	9	5	14	.	.	.
23	6	3	9	.	.	.
22	8	1	9	33	14	47
21	8	3	11	23.91%	21.88%	23.27%
20	2	2	4	.	.	.
19	4	5	9	.	.	.
18	7	3	10	.	.	.
17	6	6	12	26	15	41
16	2	.	2	18.84%	23.44%	20.30%
15	7	1	8	.	.	.
14	7	2	9	.	.	.
13	5	1	6	.	.	.
12	5	.	5	21	4	25
11	2	.	2	15.22%	6.25%	12.38%
10	2	1	3	.	.	.
9	1	.	1	.	.	.
8	.	.	.	1	0	1
7	.	.	.	0.72%	0.00%	0.49%
6	.	.	.	.	.	.
5	.	.	.	.	.	.
計	138	64	202	100.00%	100.00%	100.00%

数が少なく殻の計測はしていない。殻の最大は殻高39mm、重量2.3gのものもあったが、多くは殻高31mm以下重量1g以下、小さいものは殻高10mm程度で重量0.1g未満であった。

ルリガイは暖海に浮漂する群体クラゲの1種ギンクラゲ *Porpita pacifica* LESSONを餌として、

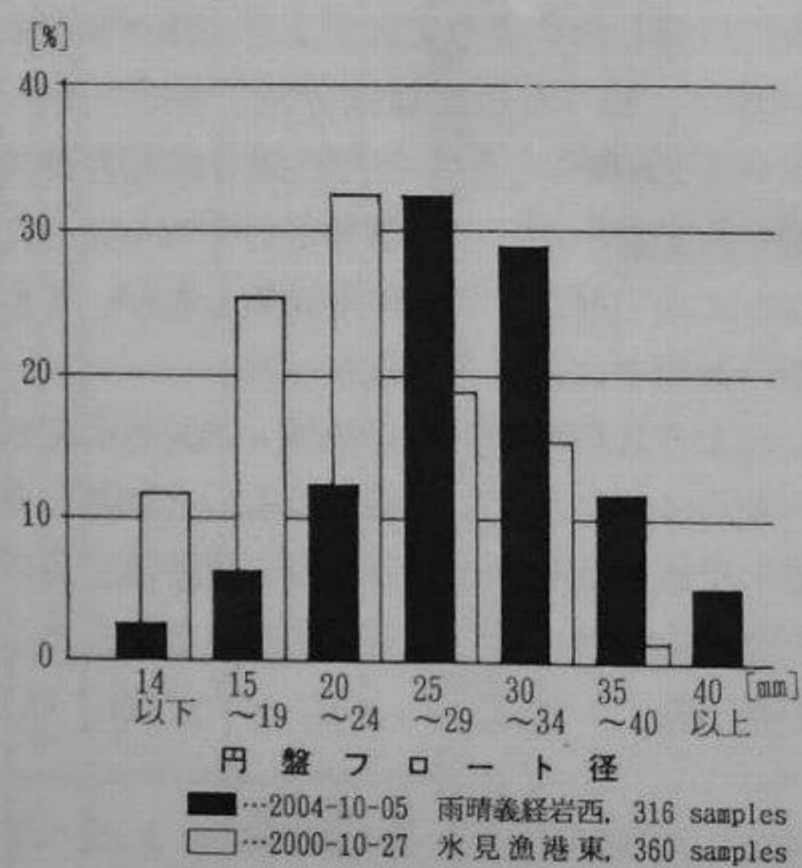


図1 漂着したギンクラゲの円盤フロートの大きさ

表2 2004年ルリガイ計測値2 (重量)

重量(g)	国分	雨晴	計
2.5	.	.	.
2.4	.	.	.
2.3	.	1	1
2.2	.	.	.
2.1	.	.	.
2.0	.	.	.
1.9	.	.	.
1.8	.	.	.
1.7	.	.	.
1.6	.	.	.
1.5	.	.	.
1.4	1	.	1
1.3	.	.	.
1.2	.	1	1
1.1	.	2	2
1.0	6	.	6
0.9	4	3	7
0.8	8	2	10
0.7	10	7	17
0.6	12	6	18
0.5	18	6	24
0.4	13	8	21
0.3	15	8	23
0.2	16	10	26
0.1	19	7	26
0.1未満	16	1	17
計(個)	138	64	202

その群れを追って浮漂するとされる。2000年秋の場合もそうであったように、今回もギンクラゲが多数漂着していた。

雨晴でルリガイと一緒に採集したギンクラゲの円盤フロートの大きさを計測して2000年秋季に380個を計測した氷見漁港東での結果と比較した(図1)。計測した316個についてみると径25mm~35mmがほとんどで2000年秋季よりはやや大きいものが多い。ただし、この比較は300個体以上採集できた地点の比較であって、異なった採集地点を調べればこれとは異なる結果になるかもしれない。この点に関しては今後さらにデータを増やしたい。

文献

邑本順亮, 2000, 珍しいルリガイの漂着, JANOLUS, 103, 18.  
 邑本順亮・布村昇, 2001, 2000年秋季における富山湾西部海岸への暖流系大型浮漂動物の漂着, 富山の生物, 40, 43-48.

南の島にワラジムシを求めて6  
 - 八重山石垣・与那国 -

布村 昇

富山市科学文化センター〒939-8084 富山市西中野町1-8-31

Short Collecting Trips to the Subtropical Islands-6

Noboru Nunomura

Toyama Science Museum, Nishinakano-machi, 1-8-31, Toyama-shi, Toyama 939-8084, Japan

今年は夏にポルトガルのワラジムシシンポジウムにも出かけたので、秋には遠出を控えようと思っていたが、やはり秋も深まると我慢できなくなり、予算や議会のスケジュールを見計らって11月末に八重山へと向かった。石垣への直行便は東京、大阪、名古屋、福岡があるが、名古屋経由だけが席が空いていたので、また名古屋経由での石垣行になった。

今回は当初、本邦最西端の与那国と琉球最南端の波照間の両方を調査したいと考えたが、万一、季節外れの台風なども考え、与那国だけにし、代わりに石垣島の調査を加えた。勤務を終え、最終の名古屋行きの列車に乗り、名古屋に泊り、その翌日、お昼前の飛行機で石垣へ飛んだ。

石垣へ

午後3時過ぎに石垣空港に着いた。いつものことながら、飛行機から降りたときの温度差を含んだ風というか空気の違いがたまらない。

民宿の送迎車で、白保へ行った。日が暮れるまでの時間が惜しいので、最低限の荷物を持ち、近くの海岸で海浜生息種を探した。潮もすでに高くなっていてせいもあるが、取れたのはフナムシのみであり、幸先は良くないと思われた。富山よりかなり日没が遅いとはいえ、陽が落ちそうな時刻になり、宿に帰った。



1. 石垣島の白保海岸